E-7

北琉球奄美語与論島方言における対格標識と示差的目的語標示

宮川 創

【キーワード】北琉球奄美語与論島方言, 言語類型論, コーパス, 示差的目的語標示 (differential object marking: DOM), 対格標識, 有標主格 (marked nominative)

1　はじめに

北琉球奄美語与論島方言は、日琉諸語のうちの琉球諸語のうちの北琉球諸語のうちの奄美語の一方言である (Shimoji 2010: 3、Pellard 2015: 17 など)。しかし、与論島方言は、国頭語、あるいは、沖縄北部・与論・沖永良部語の一部とする説もある (Tohyama & Seraku 2016: 57–81 など)。そのほか、SIL International の事業を中心に与論語を一言語として独立させる記述もある (Ethnologue: Eberhard et al. 2022、ISO 639-3 など)。

与論島は、沖縄本島北部と沖永良部島に挟まれている。この与論島で話されている与論島方言は、沖永良部島方言や沖縄北部方言など、有標主格 (marked nominative) の言語に囲まれている。有標主格型とは、自動詞主語 (S) と他動詞主語 (A) が音を有する同じ形式で標示されるが、他動詞目的語 (O) は標示されない (ゼロ形式で標示される) 言語である。主格・対格型の数多くの言語は、どちらかの格が無標である場合、主格が無標になるため、有標主格は類型論的に珍しく、アフリカ大陸中央東部・メラネシア東部・北アメリカ大陸中央西部といった地理的に非常に限られた地域で固まって見られることが特徴である (Handschuh 2014:13)。そして、下地 (2015) によって、奄美・沖縄から成る北琉球も珍しい有標主格型言語が多い地域の 1 つであることが指摘されている。例文 (1a・1b) で、与論島に地理的に近い、北琉球沖永良部島方言および、北琉球伊平屋島方言の有標主格・無標対格の他動詞構文の例を挙げ、例文 (1c) で、アフリカ大陸中央東部の典型的な有標主格型言語の 1 つであるオロモ語の同様の

本研究は JSPS 科研費 21K18376「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」(代表研究者: 中川奈津子)、および、JSPS 科研費 19H01265「多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成」(研究代表者: ジスク・マシュー)、そして、国立国語研究所共同研究プロジェクト機関拠点型基幹研究「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」のうち「消滅危機言語の保存研究」(研究代表者: 山田真寛) の助成を受けた。本稿に有益な助言や意見をくださった、黒木邦彦氏、齋藤浩子氏、下地理則氏、玉元孝治氏、松岡葵氏、山田昇平氏 (以上 50 音順)、Thomas Pellard 氏に感謝を表する。なお、本稿で用いられた略号は以下の通りである。2PL = second-person plural / 二人称複数, ACC = accusative / 対格, CONT = continuous / 継続, F = feminine / 女性, IMPF = imperfect / 未完了, IND = indicative / 直説法, NOM = nominative / 主格, NOM1 = first nominative / 第一主格, SFP = sentence final particle / 終助詞, PST = past / 過去.

構文を例示する。

(1) a. 北琉球沖永良部島国頭方言 (横山 2017:120)

seNsee=ga ucja abit-ut-a-N=doo
seNsee=ga ucja abi-u-a-N=doo
先生=NOM 2PL 呼ぶ-CONT-PST-IND=SFP

「先生があんた達を呼んでいたよ」

b. 北琉球沖縄伊平屋島方言 (Carlino 2020: 84)

tarooga omoča koočan
taroo=ga omoča koos-ta-m
太郎=NOM おもちゃ 壊す-PST-IND

「太郎がおもちゃを壊した」

c. オロモ語ハラル方言 (アフロ・アジア語族クシ諸語; Owens 1985: 251)

haat-tii okkóttée goot-t-i
母-NOM 鍋 作る-F-IMPF

「母は料理している (lit. 鍋を作っている)」

これらの例文では、他動詞主語 (沖永良部 seNsee、伊平屋 taroo、オロモ haat-) には、有標の主格 (沖永良部・伊平屋 =ga、オロモ -tii) がついているのに対し、目的語 (沖永良部 ucja、伊平屋 omoča、オロモ okkóttée) には、対格の標識はついていない。与論島方言は、例文 (1a・1b) のような有標対格型の言語に囲まれていながら、対格標識がある。つまり、与論島方言は、有標主格型ではない。そして、その対格標識の形は、=(i)NcjaN、あるいは、=(i)Ncjaa である。形式的に見て、この与論島方言の対格標識は、日本語諸方言の対格標識 =wo (=o) や宮古語の =u などの対格標識とは対応せず、日本語の九州のいくつかの方言や奄美語のいくつかの方言における対格標識 =ba (例：日本語九州柳川方言：松岡 2020: 82、北琉球奄美大島龍郷町浦方言：重野 2016: 84–85) とも対応しない。そして、この =NcjaN は、先行研究では、目的語との距離で出現できるかできないかが決まるという、=wo や =ba にはない特徴を持つ。

2 対格標識 =(i)NcjaN / =(i)Ncjaa

与論島方言の文法書である菊 (2014: 174–175) は、「（イ）ンチャン」の意味を日本語の「を」であるとし、「ただし「を」と動詞の間に文節が入るときは（イ）ンチャンは省略できません。」と述べている。これに従って、Tohyama & Seraku (2016: 76–77) では、動詞の直前以外、すなわち動詞から離れた位置にある目的語は、必ず =NcjaN によって他動詞目的語を標示し

なければならないが、他動詞の直前では、他動詞目的語標識である =NcjaN は省略可能であるとしている。Tohyama & Seraku (2016: 77) は例文 (2a・2b) を用いて、=NcjaN が、動詞との位置関係によって、義務的になるか省略可能であることを示している。Seraku & Tohyama (2018) も対格標識 =NcjaN の出現規則に関してはこの説を踏襲している。

(2) a. 与論島方言：目的語が動詞の直前であれば=NcjaN は省略可能 (Tohyama & Seraku 2016: 77)

keN=ga　　cjina(=NcjaN)　ki-cha-N
ケン=NOM1　縄 (=ACC)　　切る-PST-IND

「ケンが縄を切った」

b. 与論島方言：目的語が動詞の直前になければ=NcjaN は義務 (Tohyama & Seraku 2016: 77)

cjina=NcjaN(*=Ø)　keN=ga　　ki-cha-N
縄=ACC　　ケン=NOM1　切る-PST-IND

「ケンが縄を切った」

菊 (2014: 175–177) によれば、「ンチャン」以外にも、同じ形式の異形態として「インチャン」「ンチャナ」「インチャナ」「ンチャー」「インチャー」という形式がある。さらに、この「ンチャン」は、起点を表わす格標識である「カラ」、トピック標識である「ヤ」、添加の「も」に対応する「イン」、限定・程度の「ばっかり」に対応する「バッカイ」など、日本語文法では格助詞や副助詞と言われるような他の標識をその後に取ることができるという。

菊は、与論島東部の麦屋地区の方言を記述したものだが、同じ地点の方言辞書である 菊・高橋 (2005: 640) でも、「ンチャン ɴcjaɴ」という「副助詞」が記載されており、「①動作、作用の対象となる物事を表わす。[...] ②経過する場所、時間を表わす。[...] ③出発、分離する起点を表わす。」というその意味を説明している。与論島には、麦屋の他にも、茶花、立長、朝戸、古里、那間、叶、朝戸、城といった地区があるが、このうち茶花方言の辞書である 山田 (1995: 2069) では、「-ンチャア -ntʃaa」という「助詞」が記載され、意味を「・・・をば」とし、「麦屋では-ンチャンで用いている。」と書かれている。

国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」チームは、2012 年 12 月に与論島の各集落 (茶花、立長、朝戸、古里、那間、叶、朝戸、城、麦屋西区、麦屋東区) で方言調査を行い、同じ意味の例文を方言でどう訳すか各集落で聞き取りをした。それらの例文のうち、他動詞と対格目的語があるいくつかの例文で「ンチャン」あるいは「ンチャー」の形式が表れている。例えば、30 番の例文は、「次郎、　この　荷物を　家まで　かついで　行ってくれ。」という例文である。この例文において、目的語の「荷物を」は、茶花・立長では ɲimotɕuntɕaː、古里・那間・叶では ɲimotsuntɕa、朝戸・城

では、miːmutɕintɕaː、麦屋西区では、ɲimotsuɳtɕaː、麦屋東区では ɲimotsuntɕaːna と、対格標識が付された形で訳されている (国立国語研究所 2006: 121)。なお、同報告書において、「与論方言の文法」について報告している町 (2006: 71–74) では、=(i)NcjaN / =(i)Ncjaa に相当する助詞については触れられていない。

このように、与論島の様々な方言で、対格標識 =NcjaN あるいは =Ncjaa が確認されている。この対格標識は、動詞との位置関係によって義務的になったり、省略可能になったりする。この対格標識が省略可能になる場合は、動詞の直前である。このように、対格が有標であっても、対格がある条件下では無標になる言語は、示差的目的語標示 (Differential Object Marking: DOM) 型言語と呼ばれる (Aissen 2003)。言語類型論の分野で、目的語標示の違いはどのような要因によって生じるのか、様々な研究がある。例えば、現代ヘブライ語の対格標識 et は、一般的に、目的語が定の時に出現し、定でない時は出現しない。このように、定性 (definiteness) が、目的語の示差的標示に影響している例もあれば、スペイン語の前置詞 a のように目的語の有生性 (animacy) の度合いで対格標識が有標/無標になる例もある。与論島方言も、動詞の直前に限っては、目的語標識が省略できる、言い換えれば、有標にも無標にもなるため、示差的目的語標示型言語といえるが、先行研究では、示差的目的語標示の要因は述べられていない。

3　リサーチクエスチョン (RQ)

本稿のリサーチクエスチョン (research question: RQ) は 3 つある。すなわち、「先行研究が述べるように本当に動詞の直前以外の位置では=NcjaN は義務的なのか」(RQ1)、「動詞直前の位置で、目的語の有標・無標、すなわち、示差的目的語標示がどの様な要因で生じるか」(RQ2)、そして、「与論島方言の対格標識=NcjaN / =Ncjaa に対応する他の日琉諸語の語彙はないのか」(RQ3) である。

=NcjaN が動詞の直前では省略可能で、それ以外では義務的であるとしている先行研究（菊 2014、Tohyama & Seraku 2016）では、データのインフォーマントは与論島の麦屋地区の二人の話者に限定されている。そこで、様々の年齢の、より多くの話者のデータでも調べる必要がある。そこで、RQ1 と RQ2 に関して、さらに詳細に調べるために、『与論のしまがたり』(ユンヌ・ヌ　シマムヌガッタイ; 菊 1985) という書籍をコーパス化して分析した。これは、菊千代氏によって収集された、与論島方言での民話集であり、はる書房（東京）から、1985 年 7 月 30 日に初版第 1 刷が発行された。ページ数は総 314 頁で、与論島方言の民話には、日本語共通語で、行間に語釈が付されてある。本書には、明治 28 年から大正 13 年生まれの話者 11 人による 38 の昔話 (しまがたり) が収録されている。

本研究では、本書の画像の電子化を行った。その後、国立国会図書館の NDL OCR という光学文字認識プログラムを用いて、デジタルテキストを埋め込み、「ンチャン」・「ンチャー」などの形式を検索し、その情報を書き出した。しかし、これだけだと、無標の目的語がヒッ

トせず、有標の目的語しか分析できないため、集中的に 1 週間程度の時間をかけて、目視と精読によって、総 314 頁から、有標・無標どちらも含む全ての目的語とその他動詞、そして、前後文脈などを抜き出し、Microsoft Excel のスプレッドシートにまとめた。このスプレッドシートに書き記した情報は、対格標識の有無とその種類、他動詞、前文脈、後文脈、目的語の有生性、目的語の定性である。目的語の有生性と定性も指標に入れたのは、多くの示差的目的語標示型言語が、有生性あるいは定性をその異なる標示の要因としているからである。

4　結果と考察

『与論のしまがたり』中の目的語は、対格が無標の場合と有標の場合があり、有標の対格標識ものは、「ンチャン」と「ンチャー」と「インチャン」の 3 種類があり、「ンチャン」と「ンチャー」には「ヤ」というトピック標識がつくものがあった。表 (1) に、動詞との距離と対格標識の有無と種類の頻度を示す。なお、本書では「私を」を意味するなど、「ンチャン」が 1 人称代名詞「ワ」に続くときに中黒なしで書かれる場合があったが、それは「ワ・ンチャン」と解釈した。また、中黒が、「ワ・ン・チャン」となりながら、語釈では「ン・チャン」に対して「を」と書かれている場合もごく少数あったが、それらは誤植であると解釈し「ンチャン」に計上した。

動詞との距離 (文節単位)	無標 =Ø =ACC	ンチャン =NcjaN =ACC	ンチャン・ヤ =NcjaN=ja =ACC=TOP	ンチャー =Ncjaa =ACC	ンチャー・ヤ =Ncjaa=ja =ACC=TOP	インチャン =iNcjaN =ACC
1	536	30	0	3	0	3
2	17	15	2	0	2	0
3	8	6	1	0	0	0
4	3	0	0	0	0	0
5	0	1	0	0	0	0

表 1 『与論のしまがたり』に出現した対格標識、および、目的語の動詞との距離

表 1 のように、動詞と 2 文節以上離れている場合、すなわち、動詞の直前にない場合でも、=(i)NcjaN / =(i)Ncjaa なしで、無標で目的語をマークする場合が 17+8+3=28 例あった。この 28 例のうち、16 例がトピック標識である=ja「は」が目的語に付され、1 例が添加の標識である=iN「も」が目的語に付されていた。これらを除外すると、11 例が、他の副助詞なしの全くの無標の目的語が動詞から離れている例となる。確かに、目的語が無標になる場合は、表 (1) のデータから、動詞の直前がほとんどだが、先行研究とは異なり、今回の調査によって、動詞よりも 2 文節以上離れている目的語が無標である例も存在することがわかった。日本語共通語では =wo=wa と、対格標識とトピック標識を組み合わせることができないのに対して、与論島方言では、菊 (2014) によれば、=(i)NcjaN(a) / =(i)Ncjaa にも、トピック標識=ja を付すこ

ともでき、実際に『与論のしまがたり』のなかで、=NcjaN=ja と =Ncjaa=ja の例がそれぞれ 3 例と 2 例あった。対格標識にトピック標識を後接することができるならば、目的語にトピック標識がついていても、それが動詞から 2 文節以上離れている場合、有標対格の =NcjaN=ja あるいは =Ncjaa=ja となることもできるはずである。よって、動詞直前以外において目的語がトピック標識を持つが対格標識を持たない 16 例を除外するべきではない。このように、動詞直前以外の位置でも無標対格の目的語は存在するかという RQ1 に関しては、今回のコーパス分析ではそれが存在することがわかった。

次に、RQ2 に関する、目的語の有生性と定性と示差的目的語標示との関係について述べる。表 (2) のように、目的語の有生性の有無と定性の有無は、目的語の対格の有標・無標の条件ではない。しかし、目的語が無生・不定の場合、目的語の対格標示が無標であることがほとんどであることから、目的語が無生・不定である場合、対格が無標である傾向があるといえよう。

	有生・定目的語	有生・不定目的語	無生・定目的語	無生・不定目的語
有標対格	37	2	19	5
無標対格	25	44	45	450

表 2 『与論のしまがたり』における対格の有標/無標と目的語の有生/無生・定/不定の関係

最後に、RQ3 である =(i)NcjaN / =(i)Ncjaa の起源について述べる。北琉球諸語の様々な辞典および文法書において格助詞および副助詞で、与論島方言の=(i)Ncjan(a) / =(i)Ncjaa に形式が近く、機能も近いものを調査した。結果、他の日琉諸語で、対応する対格標識は見つからなかったが、限定の「だけ」の意味をもつ助詞が形式的に与論島方言の対格標識に近く、その対応語の有力な候補として浮上した。例えば、沖永良部島では、平山 (1986: 853) によれば、沖永良部島和泊方言には、体言に下接し、範囲の限定の機能を持つ「だけ」を意味する「ンチャ [ntʃa] 」という形式があるほか、平山 (1986: 885) によれば、沖永良部島知名方言に同じく「だけ」を意味する範囲の限定の「ンキャー [Nkjaː] 」もある。沖縄本島では、仲宗根 (2011: 623) によれば、沖縄本島今帰仁方言に「だけ、のみ」など「限定を表す副動詞」である「ンちャー Ncaa」がある。野原 (1986: 245) によれば、沖縄本島漢那方言で、限定を表す「ンチャ」あるいは「ンチャー」がある。さらに、沖縄本島金武方言 (p.c. 玉元孝治) でも、ンチャ「でも」という形式があるという。これらの例は、与論島方言の=(i)Ncjan(a) / =(i)Ncjaa に形式的に近く、名詞の後につけられるという点で、統語論的な位置も同じである。「限定 → 対格」という意味変化を説明しなければならないことが必須の課題である。

5 結論

与論島方言は、周辺の諸方言のように有標主格・無標対格型ではなく、有標主格・有標対格型である。そして、対格標識=(i)NcjaN / =(i)Ncjaa は動詞の直前では省略可能であり、動詞

の直前以外では義務的であると先行研究では説明されてきた。しかし、本研究の『与論のしまがたり』(菊 1985) を用いたコーパス分析により、先行研究の記述とは異なり、動詞の直前以外でも目的語の対格標示が無標の例が複数例あることが確認された (RQ1 への回答)。これは、与論島方言では目的語の動詞との位置関係に関わらず、広く示差的目的語標示が見られることを意味する。そして、本コーパスでは、目的語が無生・不定である場合、対格標識が無標になる傾向にあることがわかった (RQ2 への回答)。ほか、日琉諸語における=(i)NcjaN / =(i)Ncjaa の対応語は何かという RQ3 に関しては、沖永良部島や沖縄本島の諸方言の限定の「だけ」を意味する標識 (例: 今帰仁方言 Ncaa など) が有力候補であることを述べた。

参考文献

Aissen, Judith (2003). Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy. *Natural Language & Linguistic Theory*. 21 (3): 435–483. // Carlino, Salvatore. 2020.『北琉球沖縄語伊平屋方言の文法』博士論文 (一橋大学). // Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.). 2022. *Ethnologue: Languages of the World*. 25th ed. Dallas, Texas: SIL International. Online version: `http://www.ethnologue.com` (閲覧日 2022-10-10). // Handschuh, Corinna. 2014. *A Typology of Marked-S Languages*. Berlin: Language Science Press. // Owens, Jonathan. 1985. *A Grammar of Harar Oromo (Northeastern Ethiopia)*. Hamburg: Helmut Buske Verlag. // Shimoji, Michinori. 2010. Ryukyuan Languages: An Introduction. In: Michinori Shimoji and Thomas Pellard (ed.), *An Introduction to Ryukyuan Languages*. 1–14. Fuchu (Tokyo): Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. // Pellard, Thomas. 2015. The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara & Michinori Shimoji (eds.), *Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use*. 13–37. Berlin & Boston: De Gruyter Mouton. // Seraku, Tohru and Nana Tohyama. 2018. The Affective Construction in Yoron Ryukyuan. *Studies in Language*, 42: 418 – 454. // Tohyama, Nana and Tohru Seraku. 2016. Towards a Description of the Case System of Yoron Ryukyuan: The Nominative Case Particles Ga/Nu and the Bare Case. *IJOS: International Journal of Okinawan Studies*, 7: 57–81. // 菊千代. 1985.『与論のしまがたり』東京: はる書房. // 菊千代・高橋俊三. 2005.『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院. // 菊秀史. 2014.『与論の言葉で話そう (4) 形容詞, 助詞, 表現意図』与論町 (鹿児島県) : 与論民俗村. // 国立国語研究所. 2016.「与論方言データ集」木部暢子 (編)『「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」与論方言・沖永良部方言調査報告書』立川: 国立国語研究所. // 重野 裕美. 2016.「北琉球奄美大島龍郷町浦方言の格標識」『広島経済大学研究論集』39 (1・2): 81–92. // 仲宗根政善. 2011.『沖縄　今帰仁方言辞典』東京: 角川書店. // 野原三義. 1986.『琉球方言助詞の研究』東京: 武蔵野書院. // 平山輝男 (編著). 1986.『奄美方言基礎語彙の研究』 東京: 角川書店. // 町博光. 2016.「与論方言の文法」木部暢子 (編)『「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」与論方言・沖永良部方言調査報告書』立川: 国立国語研究所. // 山田實. 1995.『与論島語辞典』東京: おうふう. // 横山晶子. 2017.『琉球沖永良部島国頭方言の文法』博士論文 (一橋大学).